

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月15日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520137

研究課題名（和文）近世後期文人の芸術活動

研究課題名（英文）THE ARTWORK OF LITERARY ARTISTS IN THE LATTER HALF OF THE EDO ERA

研究代表者

影山 純夫 (KAGEYAMA SUMIO)

神戸大学・名誉教授

研究者番号：30144900

研究成果の概要（和文）：頼山陽を代表とする江戸後期文人は、詩文、書、絵画、篆刻、煎茶など芸術の多くの分野に関わり、創造的な仕事を成し遂げてきた。しかし、これまではそれぞれの芸術分野において個別的に明らかにされてきた活動を、多くの分野を総合的にとらえることにより、文人達の芸術活動の総体を明らかにすることを試みた。ほとんど知られることのない篆刻や音楽、それに茶の湯との関わりを文献により明らかにすることで、文人の仕事の成果の豊かさを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： Literary artists (文人) like Sannyo Rai a representative in the latter half of the Edo era were concerned with poetry, calligraphy, picture, seal-engraving, many fields of the art including tea (煎茶), and accomplished creative works. I tried to clarify the entirety of the literary artist artwork which was clarified individually in the field of each art generally till now by grasping many fields by activity. I was able to almost clarify the richness of the result of the artwork of literary artists by clarifying the relation with seal-engraving, music and tea ceremony that was not known till now.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：芸術諸学・漢詩文・煎茶・文人画・篆刻

1. 研究開始当初の背景

(1) 近世後期文人の活動のうち、詩文、書、

絵画については、研究が進み多くの論文が発表され、多くの書も公刊されてきた。しかしそのほとんどが、個別の分野に絞った研究であり、分野相互の関連については必ずしも注意を払われてこなかった。

(2) 小石元瑞関係資料のように、その存在が知られてはいたが、多くの資料については公刊もされず、研究が進んでいないものも存在する。

(3) 細川林谷や雲華のように、ほとんど研究されてこなかった文人も存在する。

(4) 江戸や上方の文人については大いに注意が払われていたが、地方の文人との関連については研究されることが少なかった。

(5) 文人の重要な活躍分野である篆刻についてはいまだ研究が十分に進んでいない。これまでの研究は、篆刻家による主に実作に即した研究が進められていた。

(6) 文人達が集まり楽しんだ煎茶については必ずしも歴史的な研究が進んでいなかった。煎茶は、総合的な芸能であり、絵画・書・漢詩や陶芸とも深く関わるにもかかわらず、研究がなおざりにされてきた。

2. 研究の目的

(1) 文人の芸術活動が、絵画、書、詩文、篆刻、音楽、煎茶や茶の湯といった多分野に及ぶことから、各分野を超えて総体的に捉えようとした。

(2) これまで未発表の文人の芸術活動の成果

の発掘を試みた。特に、雲華や林谷の多分野の作品については発掘をおこなうことを大きな目的の一つとした。

(3) これまでほとんど知られてこなかった文人の関係した芸術分野を発掘しようとした。

3. 研究の方法

(1) これまでの先人の研究成果の調査と図書・論文複写の収集、そして研究の到達度の検証をおこなった。

(2) 文人自身による著作物の調査と重要部分の筆写や複写をおこなった。近世以前の写本も多いために、鉛筆による筆写をよぎなくされた。

(3) 研究題目と深い関係をもつ美術工芸品の所在調査と、実際の調査をおこなった。

(4) 先人の研究の成果と、文人達の著作物や作品をつきあわせて再検討をおこなった。

4. 研究成果

(1) 文人が、多分野の芸術活動をおこない多くの成果を上げたことは、頼山陽を例にとればよくわかる。山陽の文筆活動については全集が発刊されているので、よく知られているが、その他の分野については書・絵画作品が評価されてきたことが知れ渡っていることくらいであろう。しかし、その書にしても中国書家の書を学び書風を変化させてきたことについては本研究によって明らかにできた。また文人仲間の間で大いに楽しまれた煎

茶についてその漢詩から好んでいたことがわかり、また茶の湯についても無関心ではなかったことも明らかにできた。音楽については、山陽が漢詩を書いた六弦琴の発見によって関係が深かったことが証明できた。また、近世に日本に入ってきた明清楽の楽器月琴への興味も明らかにすることができた。

以上山陽を例にとったが、多分野の芸術活動との関わりについて、他の文人達の上にも見ることができることを、「近世後期文人の芸術活動」という小論で示すとともに、関連する詩文と日記、茶会記などを翻刻することで公表することができた。

(2) 雲華については、東本願寺の重要な学僧であったにもかかわらず、宗派の中でもその存在はほとんど忘れられている。その出生地である大分の中で評価されているくらいである。しかし、その文人的活動は近世後半においては大いに注目されていた。その活動の発掘を試みた。雲華の年譜は『雲華上人遺稿』に登載されたが、今回新たな情報を加えかなり詳細な年譜を作ることができた。

(3) 文人のもっとも重んじた活動は詩文であるが、詩文は書によって伝えられる。その書の一部を形成するものとして、印があり、この印の制作を篆刻と呼んだのであるために、文人と篆刻は切っても切り離せないものであった。文人達は、自ら篆刻をおこなうだけでなく、他の文人の篆刻の印を好んで収集した。そのことはそれぞれの文人の詩文からも明らかにできたが、とくに小石元瑞の印譜の公表により明らかにできた。江戸時代の後期において篆刻家は数多く、印譜類も沢山作られたことは、文人達の書いた印譜の序文や跋文によって確認できる。これまで書家によってしか注目されてこなかった印譜について、

今後は多分野からの研究が進む可能性を示すことができたのではないかと考える。

(4) これまでの茶文化の歴史においては、煎茶は茶の湯(抹茶)への批判として捉えられ、お互いに相容れないものとして捉えられる傾向にあった。しかし、本研究によって発見した小石元瑞の茶会記や雲華・山陽などの茶の湯の茶会への参加を示す詩文の明示により、煎茶と茶の湯は相容れないものではなく、文人の中では共存するものであることを明らかにすることができた。煎茶と茶の湯の共存の例は、すでに近藤芳樹のような日本的文人(いわゆる漢学を基礎とした文人ではなく、和学を基礎として多分野の芸術活動をおこなった文化人を呼ぶこととする)に見られるし、武士階級の中でもその二つが共存していたことは明らかである。

(5) 文人達と当然のこととして関連づけられてきた煎茶について、それぞれの文人との関係を明らかにすることができた。これまで煎茶との関係でしばしば取り上げられてきたのは、田能村竹田や青木木米であるが、彼らと煎茶の関係を詩文の検討により再確認するとともに、他の文人と煎茶の関わりを詩文や史料、美術工芸品の発掘により明らかにした。特に小石元瑞関係の煎茶史料はかなりの数残っており、文人と煎茶の関係を明らかにする重要なものであった。元瑞は、品茶記(茶の種類を判別する遊びの方法を定めた文章)を作ったが、これが使われたことはなく、新たに浦上春琴と岩崎鷗雨により品茶記が作られた。その序文を元瑞は残しているが、今回春琴と鷗雨による品茶記を発見することができた。今のところ日本で作られたもっとも古い品茶記として価値は高い。

(6) 琴が清雅をもたらすものとして文人に好まれたことは知られていたが、資料により明確に示されることは必ずしも多くはなかった。本研究においてそれを示すとともに、新たに従来の七弦琴以外の琴を発見し文人との関わりを示すことができた。また、現在ではほとんど忘れられている明清楽で用いられた月琴への文人のまなざしを示すことができたことも重要であるとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 影山純夫、雲華上人年譜、日本文化論年報、査読無、15号、2012、pp7-14
- ② 影山純夫、近藤芳樹の学問と思想、国際文化学研究、査読無、35号、2010、pp45-70
- ③ 影山純夫、村田清風・木戸孝允と近藤芳樹、近代、査読無、103号、2010、pp1-9

[図書] (計1件)

影山純夫、為国印刷、「近世後期文人の芸術活動」研究成果報告書、2013、58

[その他]

ホームページ等

2012年11月17日から12月9日までの2週間、京都市東山区南禅寺町の野村美術館地下展示場において、本研究の成果を公に提供するために、「近世後期文人の芸術活動」と称する展覧会を開催した。個人所有の絵画・書・漢詩・篆刻・琴のほか、神戸大学

所蔵の篆刻資料や野村美術館所蔵の書・煎茶器など33点を展示した。入場者は、野村美術館の一階展示と共通のため正確な人数は把握できていないが、800人以上であったと思われる。展示作品は、文人の芸術活動の主な分野を網羅していたので、入場者には文人の芸術活動の成果の豊かさを実感してもらえたと考えている。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

影山 純夫 (KAGEYAMA SUMIO)

神戸大学・名誉教授

研究者番号：30144900

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

船阪 富美子 (HUNASAKA HUMIKO)